



Title	国際地域看護研究会の歩みとこれから : 20周年を迎えて
Author(s)	国際地域看護研究会
Citation	目で見えるWHO. 2022, 80, p. 10-13
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/89353
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

国際地域看護研究会の歩みとこれから ～ 20周年を迎えて～

国際地域看護研究会

はじめに

国際地域看護研究会（以下、本研究会）は、現在、兵庫県立大学名誉教授で本研究会顧問でもある森口育子先生より、国際看護学領域の大学院修士・博士課程修了生を中心として、2001年に発足し、今年で20周年という節目を迎えました。

本研究会は、国際地域看護に関する研究・教育の発展のため、会員相互が広く意見を交換し親交を深めることにより、国際看護の発展に貢献することを目的としています。関西地区を中心に年に5～6回ほど定例会を開催し、国内外における様々なフィールドをもつ実践家や看護系大学教員、大学院生等が集い、研究・実践報告もしくは学位論文の報告と共有、ディスカッションを活発に行ってきました。時には、各専門分野の学識者や実践家をゲストスピーカーとして招聘し、最新の学術的知見を得る機会を設けてきました。

また、年に一度開催される「日本国際保健医療学会学術大会」における自由集会やシンポジウムを継続的に主催し、本研究会会員が相互に連携・協働して一丸となって取り組んできました。その他、国際看護に関連するセミナーを企画開催するなど、対外的にも精力的に活動し、国際看護を取り巻く課題やトピックについて、様々な切り口から発信し、国際看護のあり方を問い続け、学術的交流と実績を積み重ねてまいりました。20年間における自由集会およびシンポジウムの

テーマ一覧を以下の表にお示ししています。

主な活動である定例会では、在日外国人、難民、災害、開発途上国、海外の看護事情、外国人看護師、そして近年は

COVID19に関するテーマ等、国際看護を取り巻く多彩な報告がありました。会員それぞれの専門分野における研究の進捗や、各種学会発表の事前事後報告、取り組んでいる活動報告を行ってきました。

国際地域看護研究会主催の自由集会・シンポジウム・セミナー一覧(2003～2019年)

開催年月	テーマ	学会
2003年10月	ここが変だよ！日本の保健医療と看護～途上国からの提言～	第18回日本国際保健医療学会（日本熱帯医学会との合同大会）自由集会
2004年10月	国際協力の体験は日本の看護に役立つか	第19回日本国際保健医療学会自由集会
2005年11月	国際協力のためにどこで何を学んできたか？	第20回日本国際保健医療学会自由集会
2006年10月	適正技術開発と普及におけるコラボレーション—マラリア対策を事例として	第21回日本国際保健医療学会（日本熱帯医学会との合同大会）自由集会
2007年10月	在日外国人の保健医療 Health case for foreigner residents in Japan～いま看護に求められるもの The role of the nursing～	第22回日本国際保健医療学会自由集会
2008年10月	看護に求められる国際看護教育って何？	第23回日本国際保健医療学会自由集会
2010年9月	在留外国人と語る日本の看護～当事者と看護者と支援者と～	第25回日本国際保健医療学会自由集会
2011年11月	グローバル化社会が求める国際看護の基礎教育とは？	第26回日本国際保健医療学会自由集会
2012年11月	日本で働いている外国人看護師からみた日本の看護	第27回日本国際保健医療学会自由集会
2013年11月	国際看護の過去・現在・未来—沖縄からの発信	第28回日本国際保健医療学会自由集会
2014年11月	国際看護・保健を目指すあなたの生かし方	第29回日本国際保健医療学会（日本熱帯医学会との合同大会）自由集会
2015年11月	持続可能な Global Community health とは？看護の視点から2030年へ向けて	第30回日本国際保健医療学会ミニシンポジウム
2016年10月	国際看護の原点と新時代への挑戦～グローバル化の進展とともに～	国際看護セミナー
2016年12月	グローバル化の中で日本の看護がいかに人材育成に貢献するか—外国人看護師との協働をめぐる今とこれから—	第31回日本国際保健医療学会自由集会
2017年11月	多文化『共創』時代を拓く国際看護のカー健康格差の改善に向けて	第32回日本国際保健医療学会（日本熱帯医学会・日本渡航医学会との合同大会）自由集会
2018年12月	私たちに世界と未来を変革する力がある：東京オリンピックに向けた看護の取り組み	第33回日本国際保健医療学会自由集会
2019年12月	住民の気づきを促し力を引き出す看護の役割と課題—開発途上国における実践課題から	第34回日本国際保健医療学会シンポジウム

創立 20 周年記念シンポジウム 「国際地域看護研究会の歩みとこれから」

2021 年 12 月 19 日、本研究会創立 20 周年という節目を迎えるにあたって、国際看護の未来を語る記念シンポジウムをオンラインで開催いたしました。本研究会会員有志 4 名でシンポジウム運営事務局としてワーキンググループを発足し、半年がかりで準備を進めました。COVID19 の収束が見込めない中、やむなくオンライン開催となりましたが、新旧会員や幅広いネットワークを通じて参加を呼び掛け、最終的な参加申込者は約 100 名におよびました。運営事務局の皆様には、企画から広報、当日の進行に至るまで多大なるご尽力をいただき、盛会裏に終えることができました。ここで、当該シンポジウムの概要を報告させていただきます。

第 1 部 国際地域看護研究会のこれまでとこれから

講演 「なぜ研究会を立ち上げ、どのように仲間と共に基盤を築いてきたか〜ピッチをチャスとして〜」

国際地域看護研究会顧問・兵庫県立大学名誉教授 森口育子先生

本研究会顧問の森口育子先生より、研究会設立の経緯と 20 年間の歴史をご講演いただきました。2000 年の WHO 本部における活動経験から、特にアジア地域のプライマリヘルスケア推進および地

域看護指導者の育成など、21 世紀に向けて新たな目標を掲げられました。そこから、国際地域看護の実践共有と蓄積により、国際地域看護学構築、実践者、教育者、研究者の交流、大学院生の学びの

場を提供するという理念のもと、本研究会が設立されました。これまで、その時々々の社会情勢や会員の変遷に柔軟に対応し、様々な課題に取り組まれてきました。紡がれてきた歴史を学び、今後の研究会



オンラインシンポジウムの参加者の様子

20周年記念シンポジウムポスター



国際地域看護研究会顧問 森口育子先生

および国際地域看護の更なる発展について気持ちを新たにできる貴重な機会となりました。

続いて、本研究会副代表の李錦純氏(関西医科大学)から、「国際地域看護研究



国際地域看護研究会代表 梅田麻希氏

会のこれまで～研究会活動を振り返って～」と題して、前代表を務めた直近5年間における本研究会の活動実績について、詳細に報告がありました。

本研究会現代表の梅田麻希氏(兵庫県立大学地域ケア開発研究所)からは、「私が描く国際看護のこれから」として、変貌する世界の中で日本の国際看護はどう変わっていくのか、第2部へとつなげる問題提起がありました。

特別講演 「国際地域看護研究会との思い出とこれからの国際看護に期待すること～プライマリヘルスケアに魅せられた仲間として～」

公益財団法人日本 WHO 協会理事長・大阪大学名誉教授 中村安秀先生

これまでの本研究会の活動に多大なご支援をいただきました、中村安秀先生をゲストにお迎えし、これからの国際看護に期待することを中心に、特別講演をしていただきました。インドネシア北スマトラ州における地域保健活動「ポスマンドウ」による国際地域看護との出会いをはじめ、コミュニティの自助自立の精神など、現地地のご経験をふまえて、プライマリヘルスケアが提示した理念について詳細に講演してくださいました。ま



国際地域看護研究会20周年記念イベント
「国際地域看護研究会との思い出とこれからの国際看護に期待すること」
プライマリヘルスケアに魅せられた仲間として



インドネシア・北スマトラ州・インドラプーラ保健所。2年間の勤務の最後に家族連れで訪問した。(1988年)

中村安秀

公益社団法人 日本WHO協会(大阪大学名誉教授)

特別講演 日本WHO協会理事長 中村安秀先生

た、COVID19により世界中で格差が広がったことや、各国で保健ボランティアの活動が活発化した現状についても述べられ、参加者は熱心に聞き入っていました。

世界はボーダーレスであり、災害と隣りあわせであること、日本は移民大国であるという現状をふまえて、国際地域看護の未来は広がっており、「学びは国境を超えて：Lessons Without Borders」という観点から、住民に寄り添ってきた地域の看護職が今後一層、国内外で活躍することを期待したいとの力強いメッセージをいただきました。

第2部 これからの国際看護を考えるグループセッション

第2部では、参加者の興味や問題意識についての事前アンケートをもとにテーマを抽出し、10グループに分かれて2度の意見交換を行いました。テーマは「保健政策・健康づくり」、「母子保健」、「災害・感染症」、「開発と健康・メンタルヘルス」、「日本に暮らす外国人・難民」、「様々な国での看護」と多岐にわたり、国内外で活躍する学生、研究者、実践家など様々な立場の参加者間で意見が交わされました。「国際協力の要請内容が高度化している一方で、地域におけるプライマ



オンライングループセッションの様子

リケアの重要性を感じている」、「枠組み作りと共に実際に活動する人材の育成とその定着も重要である」等、今後の国際保健活動に繋がる熱い議論が繰り広げられました。

運営事務局からの現地報告

当日は約70名の方にオンラインでご参加いただきました。近畿圏外はもとより海外からの参加もあり、オンライン開催の長所が発揮されました。本シンポジウムの開催趣旨である『親睦』と『国際看護の未来語り』を磁石に、既知の仲間と新しい仲間の双方に配慮した運営を心がけました。予想を超える申し込み数のため、第2部のグループ数を倍にする対応をしたことで、セッションの割り当てに時間を要しましたが、その他は大きなトラブルなく終了できたことに安堵しています。発信会場である兵庫県立大学地域ケア開発研究所には、森口先生にご来場いただきました。20年間のご貢献に、本研究会から感謝の花束と寄せ書きをお渡しできたことは、良い思い出となりました。

国際地域看護研究会の持続的発展に向けた展望

本研究会は、国際看護という概念・テーマに関心をもつ人々との新たな出会いの場であり、出会いからネットワークが形成されるつながる場であり、そして各専門分野・得意分野の知識と経験を分かち合える貴重な場でもあります。また、そこから新たな視点と学びを蓄積して育むプロセスでもあります。そのプロセスの先に、国際看護の未来を創造し拓くという展開があり、それを可能とする仲間



シンポジウムの運営事務局メンバーと
森口育子先生

達が国際地域看護研究会会員であると思っています。

現在の研究会会員の大半は関西地区の看護系大学教員であることから、今後は実践家の会員や学生会員、看護以外の関連分野を専門とする会員、関西以外、はたまた海外の会員も含めて幅広く、それこそ多様性を具現化した組織的発展が求められると思います。

COVID19によってデジタル化が加速したことで、オンライン研究会が身近になりました。全国・全世界から場所を問わずオンラインでつながることがますます現実的となり、それによって、会員の研究・活動成果のグローバルな発信が推進されると期待しています。

20周年という節目を迎えて、今後は「国際看護を基軸とした多様な仲間づくりとグローバルな発信」を意識しつつ、10年先、20年先を見据えて、本研究会、ひいては国際看護の持続的発展に向けて、決意を新たにしております。

(著者)

関西医科大学看護学部	李錦純
関西医科大学看護学部	高橋美沙子
姫路大学看護学部	藤田さやか
こころの未来研究センター	瀬川裕美
京都先端科学大学健康医療学部	那須ダグバ潤子
静岡県立大学看護学部	岩佐真也
兵庫県立大学地域ケア開発研究所	梅田麻希